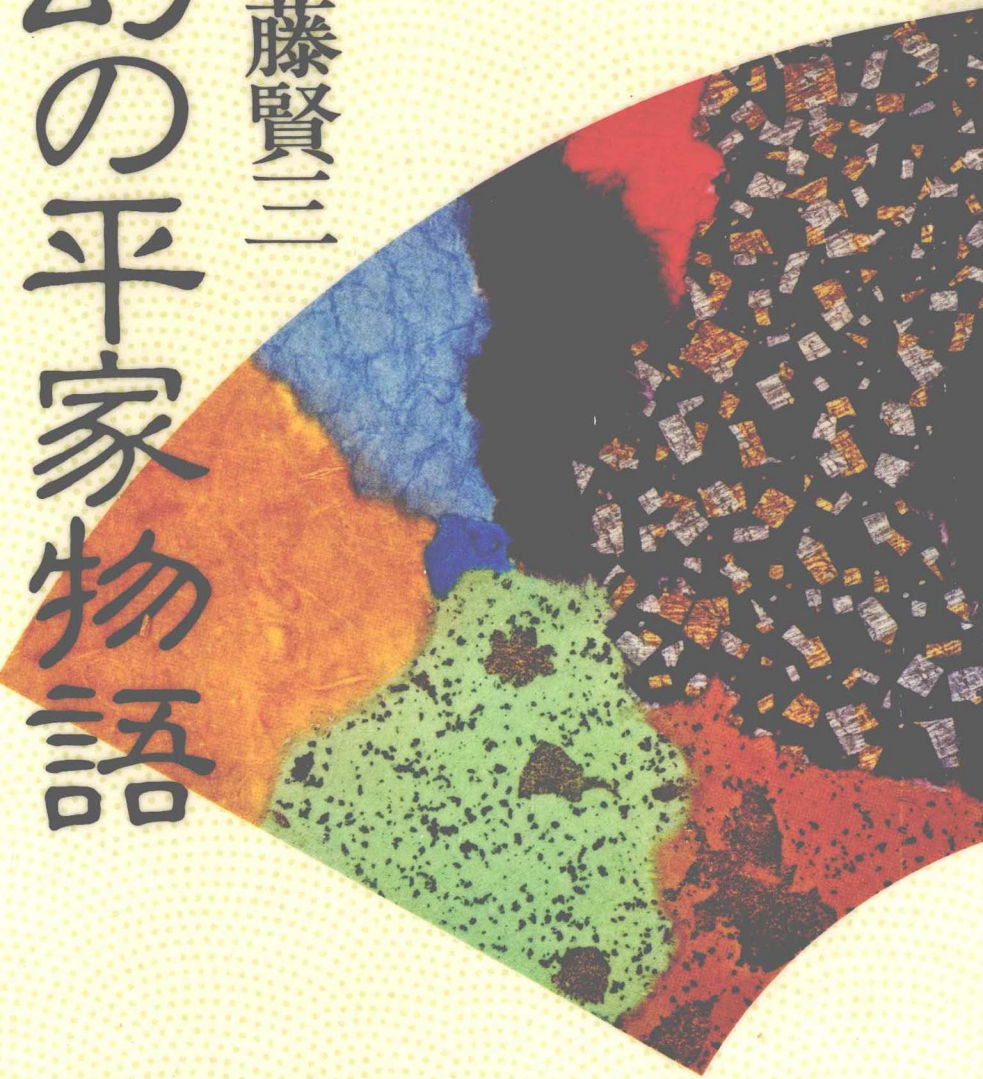
幻の平家物語

加藤賢三



幻の平家物語

加藤賢三

あずさ書房

著者略歴

加藤賢三。北海道釧路市出身。早稲田大学政経学部卒。東宝演劇部に入り，菊田一夫に師事，脚本・演出・舞台監督。現在，旅行家・ルポライター・無人島冒険家。東京近鉄百貨店友の会」旅の講師。著書に「平家落人伝説の旅」（朝日ソノラマ），「無人島人間幻視行」（サンケイ出版）ほかがある。

幻の平家物語

昭和五十六年十一月三十日　第一刷発行

定価一二〇〇円

著　者　加藤賢三

発行者　岡本陸人

発行所　株式会社あずさ書房

〒101　東京都千代田区西神田三―二―一
電話東京（〇三）二三四―〇六七七
振替東京八―三四四九五番

発　売　株式会社あかね書房

〒101　東京都千代田区西神田三―二―一
電話東京（〇三）二六三―〇六四一〈代〉

印　刷　慶昌堂印刷株式会社

製　本　株式会社難波製本

万一・落丁乱丁の場合はお取替いたします。

© 1981 Printed in Japan 0021―13004―0193

今、八百年の歴史を超えて、
瀬戸の奥津城から、
「怨念」の琵琶がとどろく。
聴け、
平家一門の、その「怨み節」を、
「幻の平家物語」を……

目次

第一章　平家残像

1　なぜ平家は赤旗なのか――平家発祥の地と赤色の謎……八
2　なぜ平清盛は悪人なのか――六波羅密寺「清盛像」の謎……二〇
3　嵯峨野女人哀話は本当か――祇王と小督伝説の謎……三六
4　なぜ俊寛だけが島に残されたか――俊寛喜界ケ島後日譚の謎……五〇
5　安徳帝は女の子ではなかったか――安徳幼帝出生の謎……六〇
6　平軍は水鳥の羽音で逃げたか――富士川合戦と水鳥の謎……七九
7　平家はどのように都落ちしたか――平家都落ち西走ルートの謎……八八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二章　平家残照

8　源平合戦の英雄は存在したか――「敦盛」と「与一」物語の謎……一二四
9　なぜ平家は支度寺で戦ったか――讃州支度合戦の謎……一三三
10　屋島からどのルートを逃げたか――平家瀬戸内敗走三十数日間の謎……一四四
11　安徳帝は南の島に落ちのびたか――安徳帝南島落人伝説の謎……一五三
12　壇の浦で安徳帝は入水したか――安徳帝替え玉入水の謎……一六八

あとがき……二二五
参考文献……二二七

装幀・カット　巌谷純介

幻の平家物語

第一章 平家残像

1　なぜ平家は赤旗なのか

——平家発祥の地と赤色の謎

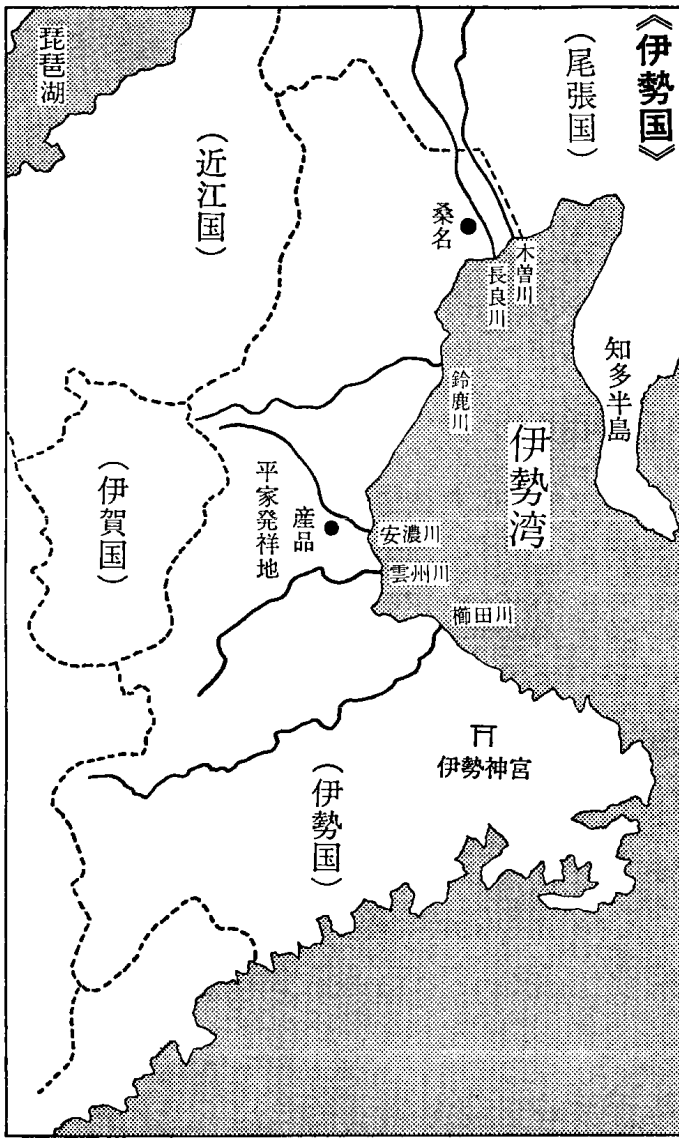
寿永四年（一一八五年）三月二十四日の夕暮れ、長門の国壇の浦の水面を朱に染めて、源平合戦は終焉を告げた。

「源平盛衰記」はこう伝える。

「赤旗赤符、海上に充満て、紅葉を嵐の吹散したるが如し。海水も血に変じて、渚々に寄波、薄紅にして流れける」

平家の赤旗は、暮色の中を西へ流れた。赤間の海峡（関門海峡）を潮にもまれ、玄界灘を越えて西へ西へ流れた。極楽西方浄土の弥陀の世界へ向かって——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


《伊勢国》
琵琶湖
（尾張国）
（近江国）
桑名
木曽川
長良川
知多半島
鈴鹿川
伊勢湾
（伊賀国）
平家発祥地
産品
安濃川
雲州川
櫛田川
伊勢神宮
（伊勢国）

北に深くくい込んでいる伊勢湾を名古屋（尾張）から左に見て南下すると、「伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ」とうたわれた伊勢の国で、伊賀、近江を狭んで、山城の国京の都へと続く要所であった。

私は車窓に移り変る風景をぼんやりと眺めながら、「平家物語」の一節を思い出していた。

当時成り上り者であった平氏の栄達に対して、平安貴族たちは、ある種のそねみもあって、はじめて殿上人となった平忠盛を、

「伊勢瓶子（平氏）は素甕（眇）なり」

と、嘲笑した。

伊勢産の瓶子（とっくり）は、素焼きの雑な甕で、精練されたものではない――という言語の中に、伊勢平氏出身の忠盛が片目をわずらって、すがめ（やぶにらみ）であるという肉体的欠陥を愚弄したものである。

「出る杭は打たれる」の格言どおり、後世京の都を牛耳った平氏も、その栄達の途では、数多の貴族たちからそねまれ、からかわれ、足を引っ張られ、その屈辱をエネルギーとして躍進したのである。

しかし、もともとは、平氏は、東国の出である。

桓武天皇の皇子葛原親王の孫の高望王が、「平（たいら）」の姓を賜わり、上總介として関東に下り、未開地を拓き、農事にたずさわりながら弓馬の道にいそしみ、貴族の荘園の管理に明けくれた。これが、桓武平氏のはじまりで、同門の平将門の反逆を鎮圧した平貞盛から、平氏の運が向いてくる。

貞盛の妻が、伊勢の豪族の女だったと言われているし、貞盛の子の維衡は、短期間であったが、伊勢守に任じられている。

平維衡が、伊勢平氏の祖だと言われるが、実際には、その父貞盛の時代はもちろん、その以前から、すでに、この平氏の一派は、伊勢の土地と係り合いを持っていたのであろう。

こうして、高望王から、国香、貞盛、維衡を経て、伊勢平氏は、忠盛、清盛へと、大きく発展をしてゆく。言わば、伊勢の国は、平家の母胎と呼んでさしつかえない。

この伊勢の国の、ちょうど、中央東寄りにあったのが、安濃津という、伊勢湾の入江で、現在の、三重県津市である。「伊勢は津でもつ……」とうたわれた港である。

清盛が伊勢から熊野詣の船出をしたところが、この安濃津（入江）で、「津」がつく地名は、当時の港である。

初夏の暑苦しい太陽の光が津市の駅頭をやいていた。実は、この津市駅から西へ約四、五キロ安濃川をさかのぼった左が、字産品と呼ばれる所で、そこの小さな丘の上に一本の細い石柱が立っている。

「史蹟　平氏発祥伝説地」

東、西、南と三方を丘山に囲まれ、北は貫流する安濃川を抱いた平野で、昔なら一つの要害となったことは容易に察しがつく。

平貞衡は、一名安濃津三郎、平家衡は、一名を鷲尾太郎、そして平清綱は、一名桑名二郎とも言っ

て、この伊勢平氏の主流派が伊勢の安濃津を中心に次々と勢力を張っていったことが判る。しかも、平氏の旧恩の家来山田家は北の伊賀、伊藤家は南の度会(わたらい)の出である。

従って、伊勢平氏は、安濃津、現在の津市を中心に、北は桑名から南は渡会に至る伊勢湾西部を領有し、伊勢神宮への重要な伊勢街道を握り、それに、伊賀、大和の国と、その子孫に渡って勢力を拡大し、徐々に京の都へのぼっていったのである。

土地の古老はこう言う。

「この平家発祥の産品はですな、近くに、えな塚(後産のものをえなと言う)とか産湯の池とかがありまして、忠盛さんがそこでお産まれになったという平家に、とてもゆかりのある土地じゃと聞いてますけん」

石柱の立つ平家発祥の丘から、北に蛇行する安濃川が見える。おそらく、平家の人びとは、当時、あの川を下って伊勢湾に出たのであろう。

平野の一部に、農民は畑を耕し川水を引いたのであろう。この三方の丘山では、狩りもおこなわれたであろう。そして伊勢湾では、漁業もおこなわれたに違いない。

特に、伊瀬の海は、北流の潮に乗った鯨やフカなどの大群が押し寄せ、伊勢の漁師と言えば、昔々から勇壮にして大胆な海の男と讃えられたという。

私は、平家の丘に腰をおろした。

夕風が、汗まみれの首すじをやさしく掃いて過ぎる。あたりはしいーんとして鳥の声一つ聞こえな

い。

「ここが、あの長門の壇の浦を朱に染めて滅亡した平家発祥の地なのか」

私は、静かに目を閉じた。その瞼に平家の赤旗が流れてゆく。しかし、平家はなぜ赤旗なのだろう。赤い布は白い布を染めなければならない。従って、白布より手に入りにくい筈ではないか。それなのに、平家が赤旗なのは、一体どうしてなのだろう？

なにか、赤旗に意味があるのだろうか。そして、また、赤色を使った理由は、そもそも何だったのだろう。

四国の徳島県に、祖谷渓と呼ぶV字型の急峻な渓谷がある。一九五五メートルの剣山から流れ落ちる清水は、祖谷川となって西へ流れ落ち、深い谷をつくる。

この隔絶の地祖谷には、屋島檀の浦の合戦で敗れた平家の落人が、越後守平国盛に率いられ、安徳帝を擁して逃れ来たという伝説がある。

祖谷川にかかる「かずら橋」よりまだ上流の、京上と呼ばれる中心地の手前に栃の瀬という所があって、そこを右斜め前方の山中に四十分程歩いて入った山の傾斜地に、かやぶき屋根が今も残る阿佐部落がある。

この部落に、ひときわ大きな「平家屋敷」が残っていて、当時、このあたりの阿佐の庄を支配していた阿佐家二十二代目の当主、阿佐利昭氏の住む屋敷である。

文政年間に記録された「祖谷山日記」には次のように記されている。

「この家に軍の旗二ながれあり。大旗は、白き布、赤き布段々にて、上に、八幡大菩薩と書けり。小旗は、中央に八幡大菩薩、右に住吉大明神、左に高良大明神となん、いとめでたき手跡にて書けり。向ひ蝶の紋あり」

平家の赤旗は、「祖谷山日記」にあるように二ながれで、当主の阿佐利昭氏は、和服で格調高く話す。

「大きい方は、おそらく本陣旗で、小さい方のが、戦場旗でしょう」

本陣旗の幅は、三尺五寸弱で、その丈は九尺弱である。戦場旗は、幅が一尺五寸で、丈が四尺五寸強である。

「本陣旗は、天正年間、蜂須賀公が阿波に領主として入国の際、刀狩りの時に短く切ったそうです」

しみのついた小さい旗（戦場旗）には、八幡大菩薩と大きく書かれ、その左右に小さく薄れた文字が見える。そしてその下に、向い蝶の紋が絵のように入っている。すでに、赤旗は赤色と判らぬほど地色が変色している。

もう一方の大きい旗（本陣旗）には、その上部の中央に、太文字で八幡大菩薩と記されている。地色は、すでに、薄いベージュ色に替わり、その下にナス紺の部分が交互に続いている。

「ここは、紫色が変色した部分です」

なんと、平家の赤旗は、本陣旗について言えば、白と紫が交互に綴られた軍旗なのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com